

# 加越能飛における縄文中期の石棒

小 島 俊 彰

## はじめに

私はかつて、富山県の縄文中期に彫刻石棒<sup>註1</sup>があることを紹介し、それが富山・石川両県地方に分布していると述べたことがある〔1972小島〕。紹介した資料は2・3にすぎなかったし、その後富山県下山新遺跡や不動堂遺跡での発掘資料〔1973・1974富山県教委〕・松原遺跡での発見品〔1974同県教委〕など、彫刻石棒の良好な資料が増加するにつれ、石棒観察の不十分さを感じ、また岐阜県にも彫刻石棒があり報告の出されていることを知るに及んでは、分布圏についても再考せざるを得なくなった。本論は、このような必要から記すものである。

中期の石棒については、発掘例の多い長野県では、縄文中期農耕論や集落構造論の中で積極的に扱われている〔1965藤森, 1963水野, 1973長崎〕。しかし、加越能飛<sup>註2</sup>では石棒が遺構に伴った発掘例はほとんどなく、よって本論は石棒自体の観察・その時期決定・分布圏のことなどを主題とする。

## 第1章 石棒研究史素描

昭和24年5月、宮坂英式によって長野県与助尾根遺跡第7号住居跡が発掘された。この住居跡には、敷石がありその中央に角柱状の鉄平石を樹立した祭壇状遺構が伴っていた〔1968宮坂〕。この発掘例は、翌昭和25年、縄文中期に原始焼畑陸耕が存在したのではないかとの考えを発表した藤森栄一の、その論拠の1つとして次のように取り上げられた。「石棒に近い磨かれた柱状岩石が、堅穴床面の一隅に石で囲まれ、極めて鄭重に立てられたまま発見されて、中期の石棒が地母神信仰の一表現として、植物栽培の存在を暗示して呉れる」と〔1948藤森〕。この後も藤森は、中期縄文文化農耕論の一つの核として石棒を扱った。

一方水野正好は、与助尾根遺跡の発掘結果か

ら、この集落は6軒を単位とした村であったと村落を復元して、それら6軒での石柱・石棒・土偶のあり方を述べた。さらに、それらの祭式の解析もおこない、石柱は狩猟神・祖家神で男性祭式、石棒は性神・育成神で同じく男性祭式、土偶は穀神・母神で女性祭式と考えられると述べた〔1963水野〕。藤森・水野によって中期の石棒は、縄文農耕論の中であるいは集落構造論の中で考えられるという、1つの位置を確保したのであった。以後長野県では発掘例の多いこともあって、続々と石棒に関する研究や発表がおこなわれている。この歩みについては、長崎が詳しくふれている〔1973長崎〕ので、ここでは扱わない。以下、今はほとんど振り返られることはないのだが、藤森・水野以前にも長い石棒の研究があったのであり、その歩みを簡単にたどっておこう。

明治19年坪井正五郎を中心に創設された人類学会の機関誌東京人類学会誌には、明治19年から同23年代石棒に関した記事が多く、考古学と人類学や民俗学とを分化できなかった会の大きな関心事であったことがうかがえる。石棒研究の中心は若林勝邦であった。氏は「石棒ノ比較研究」「日本産製石棒」を発表した〔1886・1887若林〕。その中で、石棒を精粗の2種に分け前者が奥州に多く、後者は諸国の神社に祭られているものが多いが貝塚成積時代のものだ、と書いている。

次いで石棒を詳細に観察したのは、羽柴雄輔である。氏は、粗製石棒は美質の石材を使わないが、精製石棒は石盤石や緑泥石のような緻密な石を使って彫刻するものが多く、これら石棒の型態は無頭と有頭のものに分けられ、有頭のものは一頭と両頭のものに分類できると発表している〔1888羽柴〕。この分類は基本的には現在も使われており、当時としてはこれ以上の分類はできなかったのであろう。この後、石棒の

型態研究が進められた気配はなく、わずか佐藤伝蔵が「日本石器時代石棒頭部彫刻考」を書いた位である〔1896佐藤〕。

人々の興味は、石棒の用途論とそれを使用した人種の研究に向いていたのであった。用途については、すでに江戸時代木内石亭が異志都々伊の類かと武器説を唱えていたのだが、神田孝平は争闘した武威を示す具だと考えた〔1886神田〕。若林は、軽いものは武器獵器あるいは威を示す具で重いものは祭器宝物だろうと言い、また英米人は石棒を石杵と呼んでいるという紹介もしている〔1887若林〕。坪井正五郎は、杵あるいは武器あるいは目標と〔1888坪井〕、羽柴は、粗製石棒は台湾での使用例から杵だと論じ、精製石棒は武器だと言う〔1888羽柴〕。

これに対し、石棒は男根を形どったものだと発表したのは、大野雲外であった〔1896大野〕。男根という見方は、この発表前にも研究者の口の端に掛かっていたと思うが、管見では文章上はこれが始めてである。この考え方は、その後石棒の1つの見方となった〔1902中村、1920津田〕。

これに対し柴田常恵は、「男根は明に近世の製作に属し、石棒とは截然として区別することができる」ことや、石器時代人が石棒を神体として祭ったという根拠はないと、石棒男根説を批難した〔1921柴田〕。氏自身は石棒を、一端にたいいて磨滅痕跡が認められることから、何かを搗いた杵と考えた。大型のものは、縄を掛けて搗くのだと説明している。従来の諸用途論とは異なり、石棒自体に残る磨痕から用途を導き出そうとしたのであった。

これに対し鳥居は、「吾人祖先有史以前の男根尊拝」を書き、その中で、アイヌの石器時代に男根尊拝のあったことは今更言うまでもないと断言し〔1923鳥居〕、翌大正13年柴田と同じく石棒自体の観察から、石棒の一面が平坦である場合が多いのでその面を何ものかに立てて崇拝したのであろう、と自説を補強し柴田に対し〔1924鳥居〕。また同書の中で、長野県湖東村山口発見の石皿裏面に石棒の形を浮彫りにし

たものがあることを報じ、それが火きり臼を女・火きり杵を男と称している紅頭嶼のヤミ人の例と似ており、この点からも石棒が男根を表現していると書いている。

鳥居の影響は強かったようで、大正13・14年には、「男根形の珍らしき製品」〔1924小笠原〕・「岩手県に於ける性的製作品の一二」〔1924小笠原〕、あるいは「男女生殖器を示し且つ同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」〔1925清野〕などが発表されたし、また武藤一郎は、石棒の側面に凹穴のある例を集めて、石棒は生殖器の模型で凹穴は割礼を象徴したものと見ることができる、と発表した〔1924武藤〕。他に、石棒は生殖器の病気などの祈願する崇拝物であろうとの論もあり〔1926大野〕、石棒男根説は強かったようである。

この大正後半期は、日本の考古学が学問的に画期的発展をした時であった。石棒の研究面でも、型式分類が再考されたり、ようやく層位学的方法によって始まった土器型式との対比、あるいは出土状況への注意などもおこなわれる。中心となったのは、長野県の地方史誌上での鳥居龍蔵・八幡一郎である。『諏訪史第1巻』〔1924鳥居〕では、精粗両石棒を広義には石棒といい、狭義には粗製のものを石棒、精製のものを石剣というと前置し、その狭義の石棒を有頭と無頭に大別、さらに有頭のものを単頭と両頭に分った。ここまでは、かつて羽柴がおこなったところであるが、さらに無頭のものを円端と平端に、単頭のものは頭部の瘤によって二段笠形・笠形・逆さ鉢形・鐙形に分類した。石棒の分布についても、「石棒は我邦本州地方の東半には殆んど分布してゐるにも拘はらず、この石剣の濃密分布区域が関東北地方にあり、山地の地帯には少ない」とふれている。これは、厚手派土器と薄手派土器との比較を考えているのであろう。続いて『先史及原史時代の上伊那』〔1926鳥居・八幡〕でもほぼ同様に分類するが、単頭のものをⅡからⅧの7型式に分け、ⅡからⅦ・Ⅷへは型式的な経過を示しⅦ・Ⅷは後期型だ、と言う。この石棒の時期に関しては『南佐久郡の考古学的調査』〔1933〕で、大型

品は安山岩時には緑泥片岩が使用されてこれは古式、小型品は後出型で緑泥片岩・粘板岩が素材だとまとめている。昭和10年に至ると、甲野勇が、縄文時代を前中後の三期に分けて、石棒・石剣は前期にはなく、中期に石棒、後期に石剣が出土すると、表に示している〔1935甲野〕。

なお、先の『先史及原始時代の上伊那』には、中越西原遺跡で石棒が土器3個と10間ほど離れた所で出土したこと、田切中原では深さ6尺径4尺の黒土の穴の中に土器・自然石とともに石棒の折れたのが3本並立していたと、出土状況が報告されている。大野雲外も、太き一頭の完全石棒を常陸の国行方郡麻生において発掘したと書いているし〔1926大野〕、静岡県見高の敷石住居内に有頭石棒が立っていた報告〔1928柴田・谷川〕がされるなど、出土状況への関心も高まってきた。

昭和14年に至ると、三森定男が、敷石住居が加曽利E式から局部的に現われ加曽利B式まで確かめられていると説明した後、敷石住居について「興味あるのは北辺に自然石の立石若しくは石棒が立てられてあったらしいことである」とまとめるまでになる〔1939三森〕。

一方石棒の用途については、昭和10年大場磐雄が、あるものは杵であろうしまたあるものは宝器・儀仗の性質の非実用品であろうと自説を述べ、石棒男根説は後世石棒が道祖神その他生殖神の祭神とされた点から類推したもので信すべき説とはなし難いと反対した〔1935大場〕。次いで柴田も再び石棒は杵の如き用途に充てられた日用の器具で、何等の宗教的意味を有せぬものだと言い、続けて、とすれば男根崇拜の信仰が石器時代にあったと認むべきものが他にもなく土偶の多くが女性であることを考え合せれば、「女系本位の社会組織を推測し得るかと思う」とまで論じている〔1937柴田〕。

しかし、石棒を男根と見る考え方も強かった。例えば、岐阜の石黒松吉は高山市江名子の石棒について詳しくふれ、それが女陰をも彫刻した男根を示していることはまちがいないと言い切り、同年ではあるが石黒よりも早く富山の早川莊作もまた、石棒にも女陰が彫刻されてい

ると書いたりしている〔1936石黒、早川〕。なお石黒は「赤木清氏の如きは、かかる男性性器の崇拜から、性器一般への崇拜の転化（筆者注、男根のみから男根に女陰が加えられたこと）をもって、母系制度から父系制度への社会的転換期を反映するものと見てゐられるようである」と、江馬修の考えを伝えているのは、先の柴田の考えと比較して面白い。石棒と社会組織を結びつけて考えた人に、森本六爾もいる。氏は、前期末から中期に入って定着性が強まり生業様式も共同的なものに移ったと前置し、「厚手式の時期に這入りますと、集団狩猟の傾向に制約されて集団共用の大きい石皿（臼）と大きい石棒（杵）が現れます」と説明している〔1943森本〕。

昭和14年八幡一郎は、「日本先史人の信仰問題」を著し、石棒は縄文文化中期に東日本に行なわれ西日本には甚だ乏しいと時代範囲を説明した後、用途について論じている。まず、柴田が杵説の論拠にしていた使用痕について、什器として使用したと考えられるような磨滅や破挫の痕迹は殆んど遺って居らぬと否定し、八幡自身は石棒を棍棒の類とする意見に賛意を表するものだという。続けて石棒を性器信仰の対象と見る見解については、一概に無稽の言とはなし難いが、まず型式研究を徹底せしめて、男根を表わすものであることを証明することと、発見状態から信仰関係のものかどうかを判断することに努めねばならないと言い、「一個の物、一例の状況だけでは、全般的な事を論議することは、先史学の場合甚だ危険だからである」と言い添えている〔1939八幡〕。

八幡の注意をうながした出土状況については、昭和22年後藤守一が「縄文文化時代の家の入口だろうと思われる所に、太い石棒が二本ならんで、たててあったろうと思われる遺跡をしらべたことがあります」と報じ、何かのまじないのつもりでたてていたものであらうと説明している〔1947後藤〕。また甲野勇も、武蔵由井の縄文中期の堅穴で2本の大型石棒がならんで発見されたことを報じ、「比様な石棒を安置する堅穴の主のその集団に於ける社会的地位は自

ら推定出来よう」と書いている〔1947甲野〕。

昭和24年5月、長野県与助尾根遺跡7号住居跡に立石遺構が検出されるのである。

## 2. 加越能飛の中期石棒

加越能飛の中期石棒を、小林達雄の言う「個体の特殊性は製作者の個性的表現であり、普遍性とは製作者が所属する集団のいわば集団的表現である」〔1975小林〕にならって、まずは1つ1つの個体を観察し、ついで普遍性を求めてゆこう。

### 個々の観察

それぞれについては、実測図と表1にゆずるが、若干の補足をしておこう。

1 大境洞窟発見の端緒となった石棒で、第5層（弥生層）に横たわっていたと言われている。完形で全長95cm。1面には、片玉だき三叉文を2段目鏝を挟んで2個向い合せに、他の3面には2段目鏝の上部にのみ片玉だき三叉文を彫っている。図で左側の三叉文は、隆帯で縁どられている。

2 正確な出土地は、不明である。2段目鏝の下4面に、片玉だき三叉文を彫る。先端には、大きな凹穴がある。

3 径約50mm高さ9mmの、葦石に覆われた稚子塚古墳からの出土と伝える。2段の鏝とも幅広で、下段のそれはやや下端が広がる。片玉だき三叉文が、4面にある。

4 中期前葉から中葉の遺物を出土する第Ⅲ地点で採集されたものである。下部へ開く幅広の鏝が1本のみ巡り、1面に両玉だき三叉文が、他の3面には片玉だき三叉文が2個ずつ向き合っている。先端に凹穴はない。

5 片玉だき三叉文が、4面にある。2段目鏝上部で欠損していて、下部の彫刻の存否は分からない。

⑥ 早川莊作氏の採集品で、氏の図〔1926早川〕によれば、13のような幅広の突出が頭部につき、片玉だき三叉文が4面にある。2段目鏝の所で欠損していて、下部は不明。先端には凹穴がある。

7 亀頭状の頭部には、4面に三叉文と先端に

穴を彫っている。下広がりの2段目鏝には、半円形花卉状の彫刻が8単位施され、胴部には片玉だき三叉文が3面のみに彫られている。下端は一見折れているかのようだが、若干の調整が加えられている。

8 片玉だき三叉文が、2面にある。亀頭状頭部に、凹穴はない。

9 2面に片玉だき三叉文が、他の2面にはV状の凹穴が3個ずつ穿たれている。先端に凹穴はない。

⑩ 上部は欠損しているが、2段目鏝は下広がりの幅広の形のようで、この下位2面に片玉だき三叉文がつく。この遺跡では、中期中葉から後葉の土器が出土している〔1963寺村〕。

11 片玉だき三叉文を2個上下に配しているが、裏面が剝落していて、1面のみかどうか不明である。石材は砂岩でやや赤味がかっており、火勢を受けたものと考えられる。この遺跡からは、中期前葉から中葉と、後期末から晩期にかけての遺物が出土している。

12 片玉だき三叉文が、1面にのみ彫られている。上部は欠損したままだが、下端部は若干磨かれて磨面が認められる。

⑬ 実物を見ていないが、円と三叉状の印刻が1組あると言う〔1972西井〕。

14 胴部の1面に縦長の盛り上りを彫り出し、ここに片玉だき三叉文を彫っている。鏝は1段のみで、先端に凹穴はない。

⑮ 早川莊作氏の採集品である。氏の写真〔1936早川〕によれば、最上端部に鏝はなく、やや下部に2本の鏝がほぼ接して巡る。鏝の上部から先端へ三叉文が彫られ、鏝の間には円文が見えるが、これらの単位数は不明である。先端の凹穴の存否も分らない。

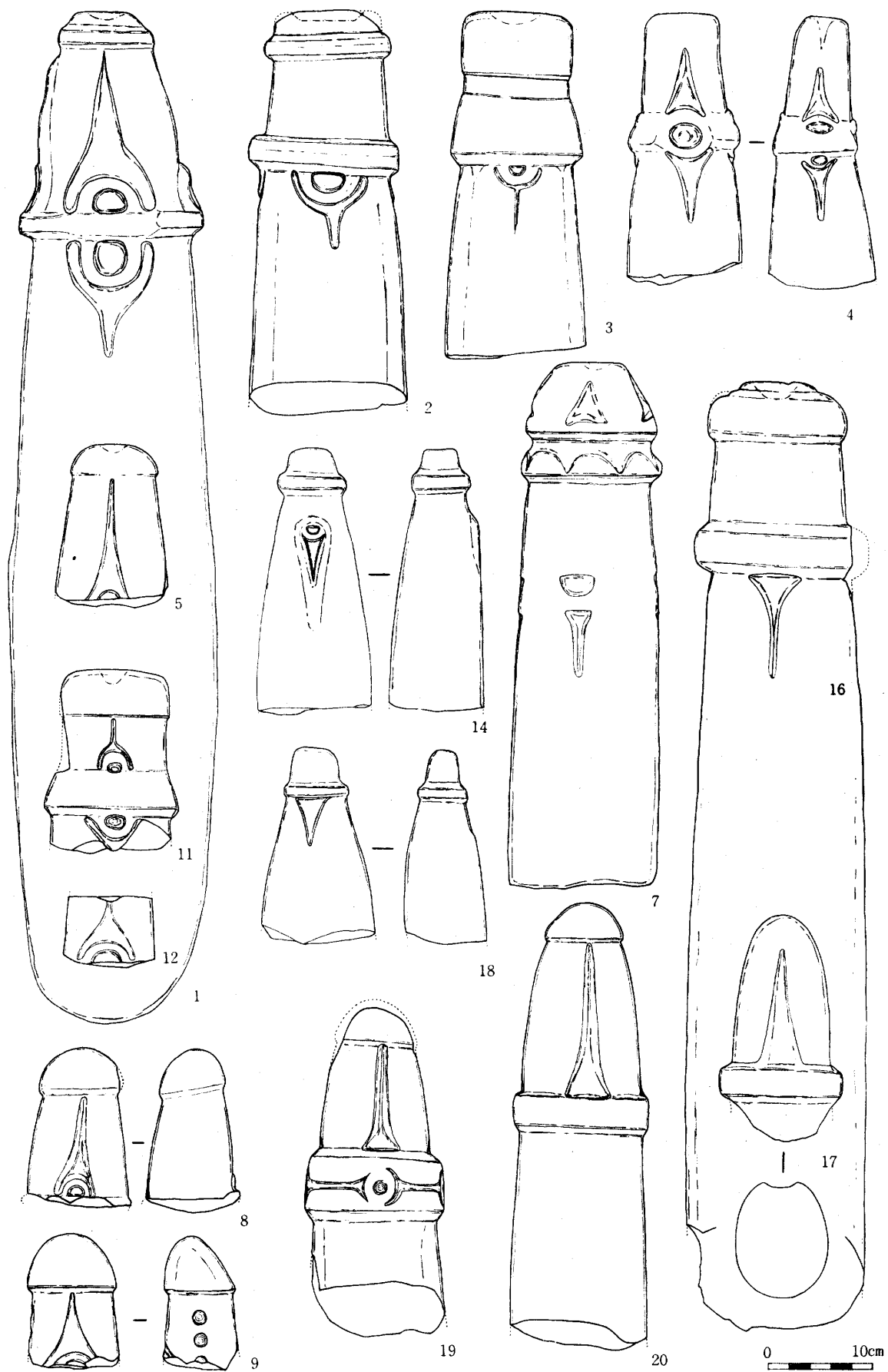
16 2段目鏝の下位4面に、三叉文を彫っている。先端には、凹穴がある。

17 串田新遺跡・南郷遺跡どちらの出土なのか、不明である。鏝は1本で、この鏝の上位に三叉文が1個彫られている。

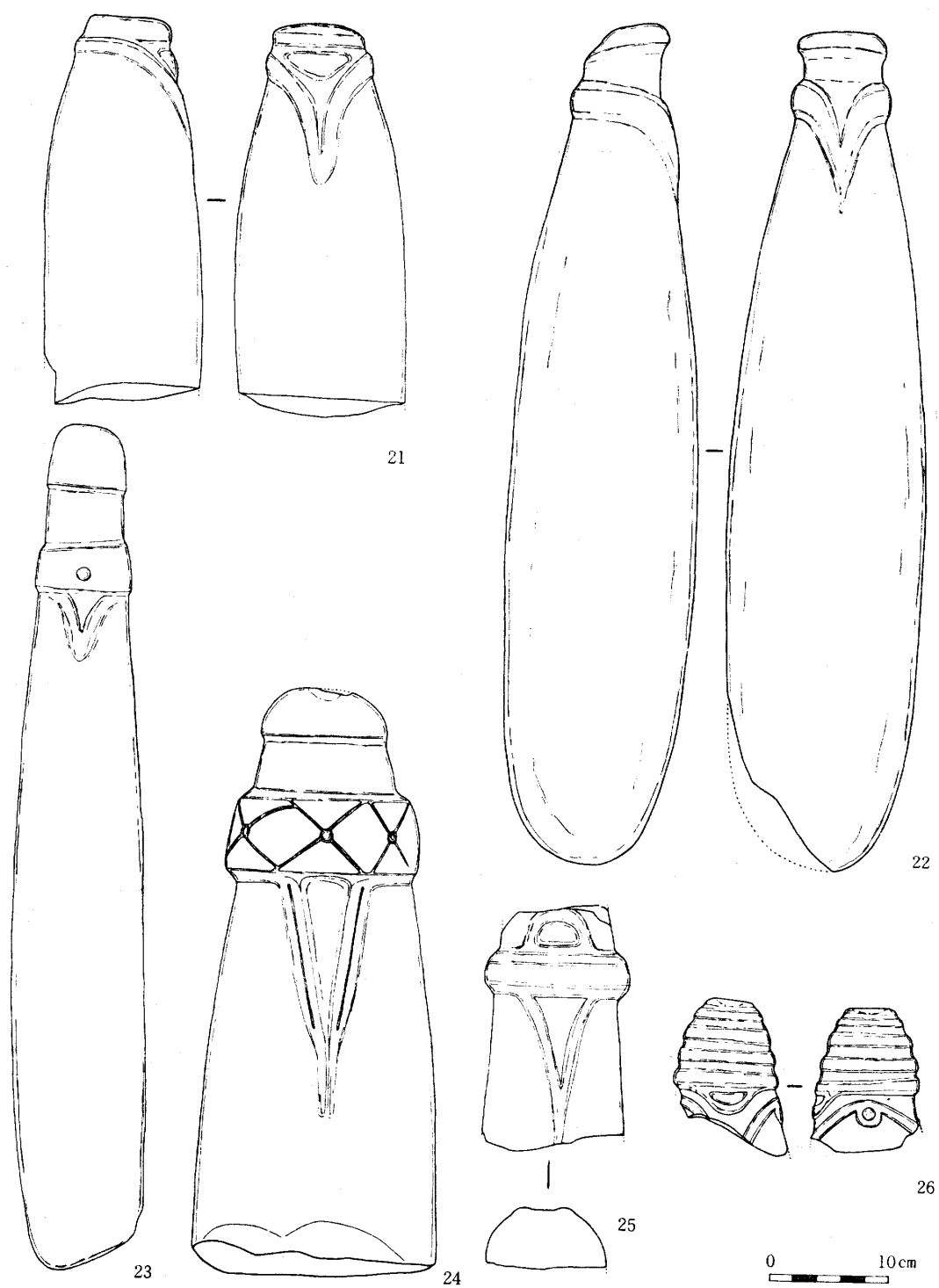
18 鏝の下位に三叉文1個彫り込む。先端に凹穴はない。

表1 加越能飛中期の石棒一覧表 (番号は図と対応 番号に○は欠図)  
(完は完形 再は再調整 ( )は欠損)

型式	番号	出土遺跡	彫刻と面数	鏝数	現在長cm	最大径cm	先端凹	石材	所有者	文献など
I型	1	富・氷見市大境洞窟	玉だき三叉文	4	2	完95	20	有砂岩	東大人類学教室	〔1922大村〕
	2	富・金沢市(?)	玉だき三叉文	4	2	37	15	有砂岩	河村義一	
	3	富・立山町稚子塚古墳	玉だき三叉文	4	2	再33	14	有安山岩	北部小学校	〔1965中口〕
	4	富・庄川町松原	玉だき三叉文	4	1	26	11	有凝灰岩	庄川小学校	〔1974富山県教委〕
	5	富・朝日町不動堂	玉だき三叉文	4	(2)	09	10	有砂岩	富山県教委	〔1974富山県教委〕
	6	富・宇奈月町愛本新	玉だき三叉文	4	2			有砂岩		〔1936早川〕
	7	富・福光町天神	玉だき三叉文	3	2	再49	15	有安山岩	福光町図書館	〔1972小島〕
	8	富・朝日町三峰	玉だき三叉文	2	2	05	11	有砂岩	竹内益太郎	
	9	富・朝日町下山新	玉だき三叉文	2	(2)	03	9	有砂岩	富山県教委	〔1973富山県教委〕
	10	富・石加賀市片山津玉造	玉だき三叉文	2	(2)	06	18	有凝灰岩		〔1963寺村〕
	11	富・高岡市勝木原	玉だき三叉文	(1)	2	08	13	有砂岩	谷口	
	12	富・高岡市勝木原	玉だき三叉文	(1)	(2)	(6)	9	有砂岩	谷口	
	13	富・小矢部市白谷	玉だき三叉文	1	1			有砂岩		〔1972西井〕
	14	富・宇奈月町愛本新	玉だき三叉文	1	1	25	11	有砂岩	小森正男	〔1967佐渡〕
	15	富・立山町中林	玉だき三叉文	?	(2)			有砂岩		〔1936早川〕
II型	16	富・城端町西原	三叉文	4	2	90	18	有凝灰岩	城端町教委	〔1959木倉・湊〕
	17	富・大門町	三叉文	1	1	22	12	有砂岩	大門町教委	
	18	富・大山町稗田	三叉文	1	1	09	11	有凝灰岩	栗山邦二	
	19	富・宮村水無神社辺	三叉文	4	2	31	12	有安山岩	水無神社	
	20	富・久々野町堂上	三叉文	4	2	42	13	有砂岩	久々野町教委	
III型	21	富・朝日町越	V隆帯	1	1	32	14	無安山岩	常泉寺	
	22	富・立山町下瀬戸	V隆帯	1	1	完70	16	無安山岩	加藤作太郎	
	23	富・福光町古館	V隆帯	1	2	完70	11	無砂岩	石清作	
	24	富・高山市江名子泉水	V隆帯	1	2	再48	21	無安山岩	森八幡社	〔1936石黒〕
	25	富・七尾市赤浦	V隆帯	(1)	2	00	12	有砂岩	三崎秀一	
	26	富・上平村西赤尾	V隆帯	(1)	4	12	9	有安山岩	西赤尾小学校	〔1972小島〕
IV型	27	石・珠洲市			2	完97	18	無安山岩	珠洲実業高校	〔1936早川〕
	28	富・宇奈月町愛本新		2	2	完93	18	無安山岩	富山県教委	
	29	富・大門町串田新		2	2	25	15	無安山岩	坂口正人	〔1936早川〕
	30	富・魚津市天神山		2	2	20	10	無安山岩	魚津歴史民俗館	〔1972小島〕
	31	富・高岡市勝木原		2	2	04	10	無凝灰岩	高岡工業高校	〔1967高岡工芸〕
	32	石・門前町和田		1	1	完90	20	無安山岩	門前町教委	
	33	富・大山町稗田		1	1	完33	9	無花崗岩	富山県教委	〔1936早川〕
	34	富・魚津市宮津		1	1	完57	17	無花崗岩	魚津歴史民俗館	
	35	富・大山町稗田		1	1	09	13	無安山岩	栗山邦二	
	36	富・黒部市前沢		1	1	27	9	無安山岩		〔1936早川〕
	37	富・清見村今谷		1	1			無安山岩		
V型	38	富・小杉町水上谷				05	14	有安山岩	水上谷墓地	〔1967佐渡〕
	39	富・宇奈月町愛本新				33	15	有安山岩	中村奇実	
	40	石・柳田村				完60		有安山岩	若林	
	41	石・柳田村				62	17	有?	長福寺	
	42	富・黒部市旧黒部中学				23	16	有?	黒部中学校	
VI型	43	富・朝日町柳田				20	16	無安山岩	中村奇実	
	44	富・大沢野町布尻				08	13	無安山岩	栗山邦二	
	45	富・氷見市朝日貝塚				09	14	無安山岩	湊	
	46	富・庄川町松原				23	12	無砂岩	富山県教委	〔1973富山県教委〕
	47	富・大山町稗田				36	12	無安山岩	富山県教委	〔1936早川〕
	48	富・滑川市千鳥				再30	14	無安山岩	富山県教委	〔1936早川〕
	49	富・立山町二塚				完31	12	無砂岩	富山県教委	
	50	富・魚津市桜峠				27	15	有凝灰岩		
	51	富・入善町坪野				03	7	有安山岩	中村奇実	
VII型	52	石・輪島市大沢				完76	20	無凝灰岩	東中江小学校	〔1973杉島〕
	53	富・平村東中江				22	13	無凝灰岩		
VIII型	54	富・朝日町不動堂				完46	15	無花崗岩	中村奇実	〔1970嵯峨井〕
	55	石・押水町ホンデン				完48	15	無花崗岩	富山県教委	〔1936早川〕
	56	富・黒部市前沢				完69	14	無花崗岩	富山県教委	〔1970嵯峨井〕
	57	石・押水町ホンデン				完33	11	無花崗岩	富山県教委	
	58	富・立山町岩峯野				完		無花崗岩	富山県教委	

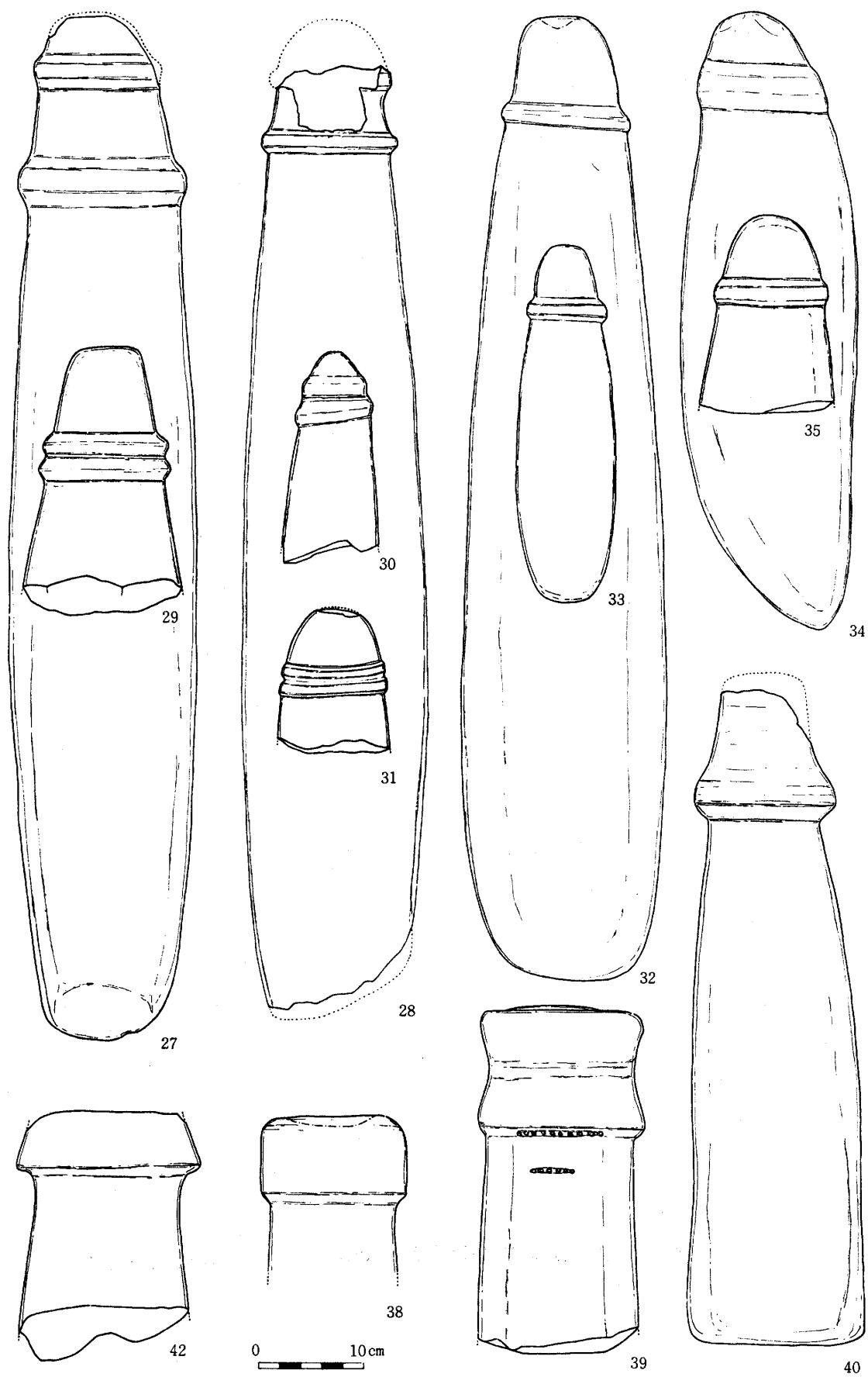


第1图 第I型式石棒(1~14) 第II型式石棒(16~20) (1/6)



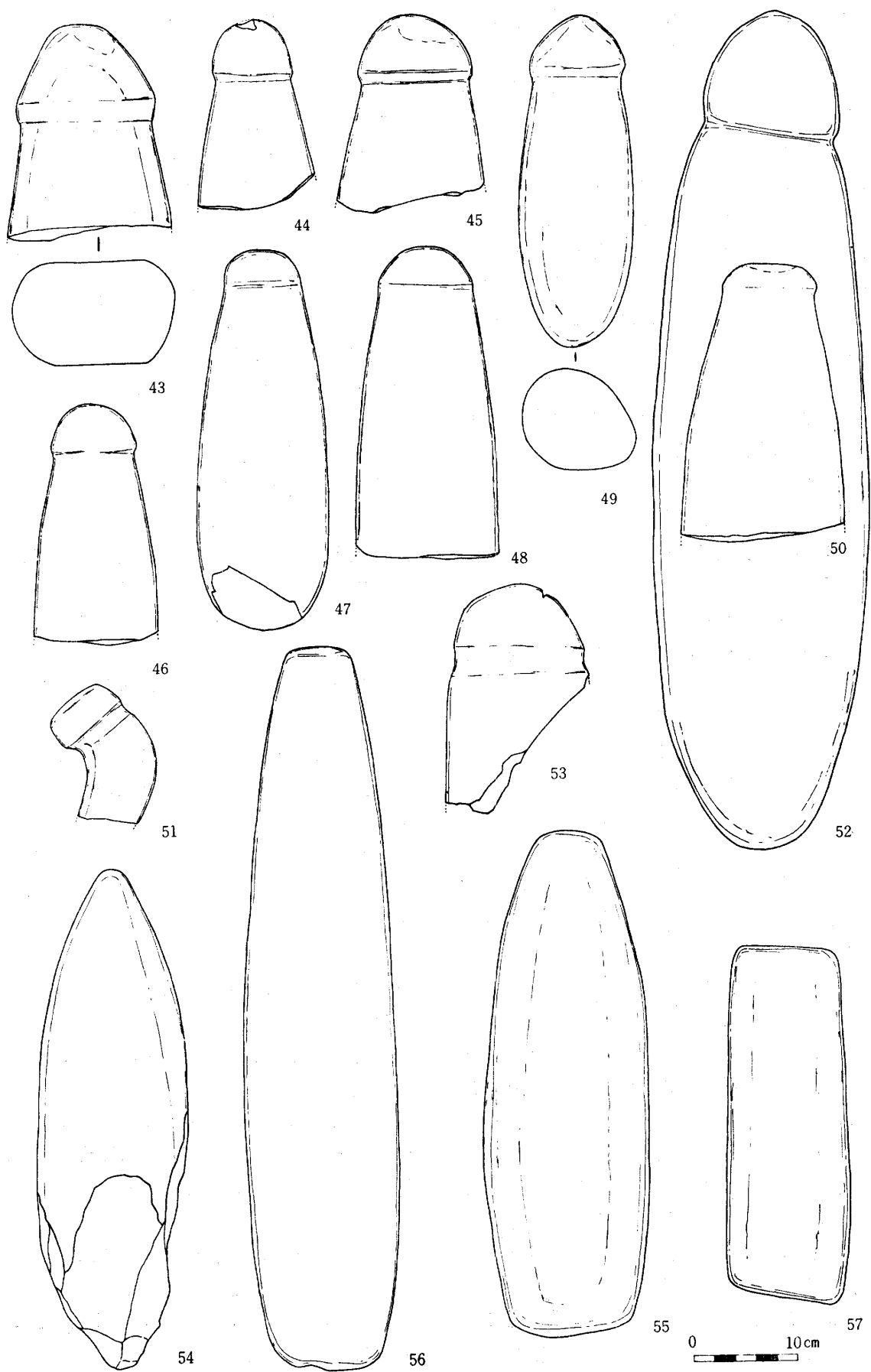
第2図 第Ⅲ型式石棒 (21~26) (1/6)

.....は、破損を示す  
 ---は、凹を示す



第3図 第IV型石棒 (27~35) 第V型石棒 (38~42) (1/6)





第4図 第Ⅵ型石棒(43~51) 第Ⅶ型石棒(52・53) 第Ⅷ型石棒(54~57) (1/6)

19 幅広の2段目鐙には、北陸の晩期の土器によく施される連結三叉文によく似た文様が4個、それぞれ玉をだいて彫られ、鐙の上位には三叉文が4面に刻まれている。

20 この石棒は、住居跡内石組炉の一角に立てられていた資料である。他の三隅にも、棒状の礫が立っていたと言う。<sup>注4</sup> 亀頭状の頭部（先端に凹穴はない）と鐙が巡り、この間に三叉文が4面に彫られている。現高約42cmで、下端は欠損したままである。欠損したままの石棒が、一部を埋めて樹立されていたのである。大野政雄氏からは、この住居跡は加曾利E2式期に当り、同遺跡の他の住居跡とは幾つかの点で特殊性を指摘できると聞いている。

21 上部を巡る鐙は、水平に半周した後V字形に下り、除々に高まりを減じる。V字形隆帯間の上部には、三角状（半円状）の高まりが彫り出されている。

22 全く完形で発見されたもので、下端部は後の欠損である。上部に、V字状に下る隆帯を配す。

23 完形品で、全長は約70cm。幅広の鐙には、1個の円文が穿たれ、この下位に鐙に接してV字状の隆帯が彫り出されている。

24 下端は一見折損しているかのようにであるが、彫整打が加えられている。幅広の鐙中央にはほぼ等間隔に円文が6個穿たれていて、この穴を中心に格子目に沈線が刻される。鐙に接して2本の隆帯がV字状に下るが、両隆帯は下部でも接せずに低まって消え去る。隆帯上にも、沈線が彫られている。

25 上下と片面が欠損していて単位は分らぬが、鐙の上位に半円、下位にはV字状隆帯を造り出している。

26 先端に凹穴を持ち、上端部に4段もの鐙を巡らす。4段目の鐙に接して下側に半円形の隆帯を配し、もう1本の隆帯がこの半円の外にV字形に彫られているようだ。このV字形隆帯は、1/4周した高みで円文を造りまた下向するが、この方の1面が剥落していて不明確である。どうも同一の繰り返し文様にはならないようである。

27 ほぼ完形で、長さ約97cm。先端に剥落があるのだが、凹穴はなかったと推測される。

28 採集時は完形であったが、戦火にあい一部欠損した。推定全長約93cm。先端の凹穴は、なかったようである。

31 全体に赤味がかっていて、火勢を受けているようである。

32 川の中からの、単独発見と聞いている。完形で長さ約90cm。1本の鐙が巡るが、石棒の身体と直交せず、斜めになっている。先端には、凹穴がある。下端は、礫本来の形を大きく残したままの整形で、歪のままで終わっている。

39 上端が臼状の造り出しとなっていて、その先端部には低い盛り上がりがある。臼状頭部の下位に、小円形が横に連続して穿たれて、2本の線状になっている。

④④ 完形品で、長さは約60cm位のようにである。上端部に38のような臼状の頭部をつくり出している。先端には凹穴や盛り上がりはなく、平坦である。

48 下端は折損しているが、若干の調整が加えられている。

49 串田新式期の住居跡の近くからの発掘品である。素材の礫体をそのまま利用していて、断面は卵形である。<sup>注5</sup>

51 断面が円形で、湾曲する体部の上端に円柱状の突端部を造り出している。下端は欠損している。

52 上端の一部を擦り込んで、それによって突出して見える部分を造っている。全体に、礫体を生かしている。

53 約3cm幅の凹帯を巡らせ、見せかけの突出部を造っている。

⑤⑤ 昭和50年度の発掘中、串田新式期の包含層から出土したと言う。55とほぼ同形同大の、両端が平坦な円柱形の石棒である。<sup>注6</sup>

#### 普遍性の追究

個々の石棒は、以上のようにそれぞれ個性を持っているが、普遍性をも求めることができる。私は、以下のように8群を認め、それを型式として把握した。

#### 第I型式（1～15）

石棒本体の上端に鏝を巡らせ、この鏝の上下に玉だき三叉文を彫刻するグループである。

鏝は、上端部の最端とそのやや下位にと2段に巡らすものが多いが、4と14の2例は鏝が1本である。最端部の鏝は、1・2のような謂ゆる鏝状のもの、3や11の円柱状、5・8のような亀頭状のものと、種々変化がある。2段目鏝もまた、細味の鏝以外に、3・11のように下広りの幅広のものもある。

鏝に彫刻するものは、4と7の2例だけである。7は、上端鏝に4個の三叉文を、2段目鏝には8個の花弁状の彫刻をしている。

鏝の上下に彫刻される玉だき三叉文は、原則的には、玉1個と三叉文1個の片玉だき三叉文である。両玉だき三叉文は、わずかに3の1面の彫りだけである。その他のものは、鏝の上下両側に配する場合でも、片玉だき三叉文2個を組み合わせている(1・3・11)。この玉だき三叉文は、4面に施されるもの、3面・2面・1面のみのものと、単位に変化がある。2段目鏝に接した上位か下位に彫られるのだが、7と14の2例は胴部に配されている。なお、玉だき三叉文あるいは片玉だき三叉文と本型式の彫刻を呼んでいるが、仔細に見れば玉は正円ではなく、半円である。鏝という直線に接して彫る故に半円となったというのではなく、もっと積極的に半円が意識されていたものであろう。

なお、本型式には、先端に凹穴を穿っているものが多いことも、注意しておこう。鏝が1重の3と6、1段目鏝が亀頭状の8・9には、凹穴はない。

#### 第Ⅱ型式(16~20)

1ないし2本の鏝と、三叉文の彫刻を特徴とするグループである。

2段の鏝を配する例は、いずれも三叉文が4面に彫られる。16は2段目鏝の下位に、19・20は上側に彫られている。1段鏝のものは、17・18ともに三叉文は1個のみである。

先端の凹穴は、わずか16の1例だけである。

#### 第Ⅲ型式(21~26)

本型式としたものは、上端を巡る鏝が、1面でV字状に垂れ下るもの(21・22・26)、ある

いは一周した鏝にV字状隆帯を加えたもの(23~25)である。

これらのグループは、V字形に下る隆帯は、いずれも1単位(26は不明)のみで、正面性が強く打ち出されている。

V隆帯以外には、25・26に半円の意匠が見られ、21のV字形の間にある隆起もまた半円を形どったものかと思われる。23には正円の1穴が、24には格子目沈線と組み合った6個の小正円が鏝上に彫られている。

#### 第Ⅳ型式(27~37)

上端部に、鏝を巡らすだけのものである。鏝は1重のものと2重のものとがある。2重鏝のものは、鏝の間隔が開いたもの(27・28)と、接したもの(29~37)とがある。

本型式で先端に凹穴を持つのは、32の1例だけである。

#### 第Ⅴ型式(38~42)

石棒上端部に、円柱あるいは臼状の頭部を造り出すものを1型式とする。38の先端には大きく浅い凹穴が、39は逆に低い突出が造られている。

#### 第Ⅵ型式(43~51)

上端部に亀頭状の突出を造り出すものである。この頭部形は、43や49のような尖り気味のもの、半円形のもの(44~48)、ほんのわずかの突出のもの(50)と様々であり、張り出しも強いものと弱いものとがある。

先端に凹穴のあるのは、50の1例のみである。例外的なものであるが、湾曲した体部に円柱状の突出をつけた51がある。

#### 第Ⅶ型式(52・53)

Ⅵ型式と同様に、上端部に亀頭状の表現をするが、凹線を巡らすことによって見た目の突出を造り出しているものである。

#### 第Ⅷ型式(54~58)

鏝や隆帯あるいは彫刻などを有せぬものを、本式とする。これには、先端が尖り気味のもの(54)、丸味を持つもの(55)、やや平坦なもの(56)、全体を円柱状にするもの(56)などを区別することもできる。

以上Ⅰ~Ⅷの8型式を設定したが、各型式間

の共通点あるいは違いなどを見ておこう。

I II IIIの各型式間には、共通点が多い。まず第1には、鏝を持つということである。第2には、この鏝（特に2段目鏝）に接して彫刻を縦位に施すこと。第3に、これらの彫刻が大きな視点では三角形という表現でまとめられるということである。またI II IIIそれぞれの型式の先端部に、凹穴が多く見られることも共通点の1つである。もっともこの凹穴には、逆に細かい使い分けもありそうである。例えば鏝が1重で1面にのみ彫刻するものには凹穴はつけられない。2重鏝でも、1面か2面にしか彫刻をせぬものには凹穴を附すものが少なく、4面に彫るものは全て凹穴はある。また2段鏝で上端が亀頭状になるものは、6例中2例しか凹穴はないが、鏝状・台状のものには全て凹穴があるということも、統一されている点である。

鏝という観点からは、IV型とI II III型の共通性を指摘できる。しかし鏝を有する点では共通性を示しながら、I II III型に多い先端の凹穴は、IV型式ではわずかに32の1例という使い分けが見られ面白い。27・28は、2重の鏝を持つのみならず、大きさや型なども1・2・16と類似するのにも、凹穴はないのである。

### 3. 加越能飛の石棒研究史

前章で見た加越能飛の石棒は、どのように研究が進められてきたのであろうか。彫刻石棒を中心に歩みをたどってみよう。

北陸の石棒をいち早く紹介したのは、神田由道であろう。両頭の石棒を図示して、富山県五箇山の小社にあったのだが、その後井波の八幡社の所蔵になったものだと書いている〔1886神田〕。

明治34年出口米吉は、兼六園など各地の陰陽石を紹介したが、その中で、卯立山の6本松に男根状の立石があり芸妓衆がおまいりした、と書いている〔1901出口〕。あるいは、石棒であったかもしれない。

石棒が積極的に扱われたのは、大正11年の大境洞窟の報告が最初であろう〔1922大村〕。大境洞窟の発掘は大正7年6月洞窟内の白山社殿

を改築しようと4・5尺掘り下げたところ大石棒が発見され、これが端となって始まったという。報告では、この点での関心もあったのであろうが、2条の隆帯のことや彫刻にも詳しく言い及んでいる。石棒の時代については、「従来アイヌ式遺跡から発掘された大石棒（中略）とは其の手法に於て趣を異にするもので、弥生式土器と共に出るから弥生式石棒とでも名づくべきではないかと、松村氏はいつて居られる」と記している。これは石棒自体の特異性の他に、第5層の弥生層から出たという認定からの帰趨であるが、この考え方の影響は後々まで長く続くこととなる。この石棒の用途については、宗教的なものか、記念的なものか、家標的なものかは不明である、と記している。

大正15年、早川莊作は『越中石器時代民族遺跡遺物』を著わした。氏の採集品を主に、各遺跡・各遺物について記しているが、石棒については、両頭・一頭・無頭のものとあること、小型のものは比較的精製で粘板岩若しくは雲母片岩で作っており、大型のものは粗製で火山岩などで作っており、と確かな見解を出している。用途については、当書が柴田常恵の校閲を受けていることもあってか、食物を搗いたもので特に大きいのは祭事の如き場合に数人で使用したものと言う。彫刻ある石棒については、愛本新遺跡の資料(6)を図示し、彫刻より推せば大境洞窟発見の大石棒(1)に似ていると喝破している〔1926早川〕。

この早川の見方があったにもかかわらず、昭和4年大境の石棒を扱った中谷治宇二郎は、「越中氷見白山洞窟発見の、頭部に彫刻のある大石棒も、弥生式期遺物層より発見されたと云ふ。そうすれば大石棒の或物は、年代の降った石器時代末期のものかと考えられる節もある」と、5層出土にとらわれている〔1929中谷〕。

昭和11年、早川は再び『越中史前文化』を発刊した。彫刻石棒についての記述は今回はないのだが、愛本新(6)と中林(15)出土資料の写真が掲載され、その扱い方は縄文時代に属するものとしている。みづから採集したその遺跡の事情から素直に位置づけられたものであろう。また注意

しておきたいのは、大山町稗田の大石棒に「中央部に女子の生殖器を模したる如き痕跡あり」と記している点である。写真で見る限りでは、私には明瞭な彫刻痕とは見えない。しかし、石棒に女陰が刻まれているという発言としては、最も早いものであろう。このような見方があったためか、用途については前著とやや変って、杵のほかにも宗教的用具などの非実用品とも考えられると言う。

早川と同じ昭和11年、『ひだびと』に石黒松吉が「石棒物語」を投稿している。江名子泉水出土の石棒<sup>(24)</sup>がなぜ下呂八幡社に蔵されたのかを書き留めたものだが、石棒の観察も詳細である。この石棒については、すでに林魁一が『史前学雑誌』に紹介して、「一見すれば粗製大石棒なれども好く見れば普通の石棒とは異にして人形に模したるかと思はるゝなり」と述べていた〔1935林〕。石黒はこれを、頭部の窪み・線刻のある突帯を説明した後、「突帯の下に着物の襟元の如き彫刻がある」と記し、この彫刻はヨニであると断言する。彫刻石棒の彫刻を、女陰と言い切った最初である。さらに、このような彫刻を4面に附し上部突帯のまわりに朱が塗ってあったものが細江村岡前に、また高山町神通寺蔵品にも似たものがあると例をあげ、さらに大境洞窟のものともほぼ系列が同じで、富山の早川氏の資料中にも数ヶあると、分布をも考えている。また泉水の石棒の時期については、出土地点散布の土器は弥生式であるが今は明言し得ないと言い、リングとヨニの形を示すようなものは、石棒の終末期型式を示すであろうと目安を出していて、やはり大境5層にとらわれている〔1936石黒〕。

昭和14年、八幡一郎は「日本先史時代の信仰」の中で、北陸の彫刻石棒をとり上げた。氏の説明の多くは石黒の「石棒物語」から取られているが、彫刻石棒の研究上一画期をなすものであった。まず彫刻石棒の時代を中期と考えていること。これは直接明言はしていないが、大石棒は中期の所産という前提に立っている。氏は分布範囲を、石黒の越中・飛騨北部に越後を加えている。越後の具体的資料は上げられてい

ないのが残念である。

繰り返すが、彫刻石棒の研究は八幡によってまとめられて、その特徴・時期・分布域に言い及ぶまでになったのである。

しかしこの成果は引きつがれることなく、以後の研究はそれぞれ新たにそして個々におこなわれるという、遠まわりの道を歩いたのである。

戦後しばらくは石棒の積極的記述は見られないが、昭和34年城端町史〔1959木倉・湊〕に示野遺跡（現在は西原遺跡）の石棒写真<sup>(46)</sup>が大きく掲せられた。所属期を縄文中期と考えている。しかしこの石棒に三叉文が4個刻まれていることなどには特に注意も払われなかったし、大境のものとの比較も考えられていない。

昭和38年、寺村光晴は加賀玉造遺跡出土の石棒を報告し、表裏に同様の彫刻がある注意すべき遺物と記している〔1963寺村〕。特に時期は明記していないが、同一図版には縄文中期中葉から後葉の土器を掲せている。

この玉造遺跡の石棒を、立山町稚子塚古墳出土の石棒<sup>(3)</sup>と似ていると指摘したのは、中口裕である〔1965中口〕。だが中口は、その形状から直感的に想像されるのは絹傘であり古墳時代前半期の石製品と考えざるを得ない、と結論づけてしまった。大境や早川氏の蔵品と出あわれなかったのが惜しまれる。

寺村や中口の発表の影響を受けてであろうか、昭和33年の『富山県の歴史と文化』の中では大境の石棒を弥生時代のもので扱っていた湊晨は、その大境の石棒について次のように書いている。「第5層より出土したものと称され、弥生式文化に石棒の存在を示す例とされているが、しかし今一度再検討すべきものと思われる」と〔1966湊〕。

昭和42年、佐渡忠作は愛本新遺跡出土の石棒<sup>(14)</sup>を図示し、「鏢状の装飾をつける下部に特異な浮彫が注意されるが、何を象どったものか、また信仰的な意味を含むものか興味ある彫刻と思われる」と記し、時期は中期を考えている〔1967佐渡〕。この石棒の発見者中村奇雲も、この42年入善町史に黒部川東岸地区の石棒の出

土地11ヶ所と48例を数え上げ、その48例中2例は女性を象徴したものとすると、彫刻を女陰と理解していることを示した〔1967中村〕。

昭和47年『富山県史考古編』が出版されたが筆者はこの中の縄文中期の項で、大境洞窟の石棒を牛滑式期の所産と考えたいこと、また同様のものは牛滑（古府）式土器の分布範囲と広がりと同じようで、富山・石川両県以外にはないこと、石棒は男性性器をその彫刻は女性性器を表現していると考えられる、などのことを記した。佐渡や中村の発言、加賀玉造遺跡・稚子塚遺跡の資料を元にしていたが、この時点での筆者は八幡や石黒の論文とは邂逅しておらず、ために分布範囲を富山・石川両県に限ったりしている〔1972小島〕。

昭和14年にすでに出されていた見通しに、全く違った道からではあったが、ようやくたどりついたのである。

#### 4. 石棒の時期と広がり

##### 時期

石棒は表採によって集められたものが多く、その時期を決定するのは難しい。しかし手があるのもあるので、各型式について考えてみよう。

第Ⅰ型式 Ⅰは大境洞窟の第5層（弥生文化層）から出土したと言われてきた。現時点で発掘時の層位を云々することはできないが、6層と5層の界は他層と違い厚い落盤によって区別されていない。必ずしも、第5層に縛っておく必要もあるまい。第6層からは、古府・串田新・気屋式期の遺物が出土している。⑩（片山津玉造遺跡）は表採品であるが、この遺跡の縄文期は中期中葉から後葉に限られている。松原遺跡の第Ⅲ地点（4）は、中期前葉から古串田新式期にわたっている。このように見ていけば、共通する時期は、中期中葉をやや下った古府から古串田新式期が出てくる。この古府式古串田新式を残りの不動堂・勝木原・三峰・下山新の遺跡で検証しても、いずれも古府式から古串田新式期を含み、うまくゆくのである。本型式は、古府式・古串田新式期の所産と考えて、大過あるまい。

##### 第ⅡⅢ型式

先に述べたように、ⅡⅢ型式はⅠ型式と関連が強く、時期的にも相似ていると思われる。西原遺跡（16）は綿密な発掘調査で、中期中葉に始まり中期後葉に最も栄え、後期初頭（気屋式期）まで継続して遺跡は終焉をとげたという〔1975岸本・池野・山本〕。ここでも、古府・古串田新式が拾えるわけだ。

このように彫刻石棒ⅠⅡⅢ型式の時期を考えていた時、大野政雄氏から堂上遺跡の住居内石組炉の一隅に石棒（20）が立てられていたという教示をいただいた。時期は加曾利Ⅱ式期だと言う。北陸の土器型式はまだ十分吟味されておらず、関東の加曾利Ⅱ式期に当るのが何型式とすべきか明らかではないが、大野氏との検討ではこの住居跡は古府・古串田新式期に当ておけば大過なからうと結論づけた。すなわち第Ⅱ型式の石棒が、古府・古串田新式期の住居跡に立てられていたのである。Ⅲ型式も、この期と考えてよいであろう。

##### Ⅳ型式

この型式を、積極的に位置づける資料はない。しかし鏝を有するというⅠⅡⅢ型式の類似点をとらえて、時期もまた同じく古府から古串田新式期と考えておきたい。

##### 第Ⅴ型式

水上谷遺跡（38）が、1つの手がかりになる。この遺跡は大規模な発掘調査の結果、古府式期の単純遺跡であることが明らかにされている〔1974橋本・神保〕。これによって、本型式もまた古府式期と推定しておく。

##### 第Ⅵ型式

手がかりは、49（二塚遺跡）にある。これは串田新式の住居跡近辺からの出土と聞いている。これによって串田新式期という一つの時期をおさえることはできるが、42のような大型のものをも串田新式期としてよいかあやぶまれる。やや幅広い設定をしておくべきかと考えている。

##### 第Ⅶ型式

大沢遺跡（57）は、中期初頭から前葉のものを少数出土するが、主体は串田新式と気屋式期

である〔1973杉畠〕。東中江遺跡(53)は、若干の古府式の他は串田新式ばかりである。このことから、この2例は、串田新式期と考えている。

#### 第Ⅷ型式

ホンデン遺跡(55)は、若干の古府式を含むが、串田新と気屋式期の多い遺跡である〔1970嵯峨井・村井〕。56と類似した58(岩嶺野)は、串田新式の包含層から出土したという。串田新式期に属するとしておきたい。

しかし、中期前葉に当る資料もある。図示はしていないが、宇奈月町桃原遺跡の資料で、長さ71cm径15cmの花崗岩である〔1967佐渡〕。






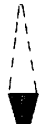


型式全体としては、幅の長いもののようだ。

以上をまとめれば下表のようになる。

〔石棒の始まり〕 加越能飛に石棒が盛んに造られたのは、古府・古串田新式期で、あたかも突然に出現したかの感を受ける。古府式期をさかのぼるのはわずかに新崎式期の桃原の1例のみである。新崎期の石棒といえば、近辺の新潟県千石原遺跡の資料がある。新崎式期の住居床面から頭部を欠損した石棒が出土している〔1973中村・竹田・小林〕。また実見していないが、新崎式の標式遺跡新崎でも、長さ1m20に及ぶ石棒が出土している〔1950四柳〕。この大石棒を直ちに新崎式期に比定はできぬが、高堀によればこの遺跡出土の土器はほとんど新崎式のみだったという〔1955高堀〕。

資料は少ないが、加越能飛における石棒の出現は、新崎式期と見通しを立てておこう。

表1 各型式石棒の時期

前期	福浦上層 朝日下層								
中期	新保 新崎 古上山田 上山田・天神山 <sup>a</sup> 古府・牛滑/(福野) <sup>b</sup> 古串田新 串田新Ⅰ								
後期	串田新Ⅱ/(宇出津) 前田/(高波) 気屋								
北陸の編年		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
石棒型式									

〔中期石棒の下限〕 古府・古串田新式期の特徴の強い石棒(Ⅰ～Ⅳ型)が串田新式期には小型化しかつ変化の少ないもの(Ⅵ～Ⅷ)になる過程を見たが、それに続くものは何であろうか。6図8は、石川県大沢遺跡出土である。気屋式期の可能性が強い〔1973杉畠〕。6図7は酒見式の標式遺跡酒見新堂で発掘された石棒である〔1974高堀・市堀〕。両頭で断面は楕円である。大沢遺跡の石棒は、これと形態が似ている。大沢や酒見遺跡の石棒は、頭部の形や断面と長さの比率から見てみると、いわゆる中期石棒と明らかに違っている。

中期の石棒は、串田新式期を限りとして終焉

したものと考えたい。少なくとも加越能飛においては、中期の石棒が変化して後期型の石棒に移行するのではなく、後期の石棒は型態もそしてその意味づけも違った別形式として、気屋式もしくは酒見式期に登場してくるものと推論している。

#### 石棒の分布域

資料の集積が不十分なので、特徴の強いⅠ～Ⅳ型式の石棒に限る。

#### 第Ⅰ型式

富山県に13例・石川県に2例と、計15の例を集めることができた。福井・新潟県には、例を知らない。岐阜県には実見した例はないが、2

・3同型式として注意すべきものがある。1つは、神岡村寺林出土のものである〔1972檜崎他〕。欠損して全体が不明だが、正円の彫刻が見える。また先に記した細江村岡前（現古川町）・大八賀村上野（現高山市）も、第Ⅰ型式の可能性が高い。

以上のような資料も加えて分布圏を考えれば、富山・石川両県と一部神通川水系をさかのぼった飛弾、すなわち加越能飛に限定できよう。

#### 第Ⅱ型式

富山県に3例・神通川上流の宮村に1例、分水嶺を越えた益田川沿いの久々野町に1例である。新潟県馬高遺跡にも、三叉文を彫り込んだものがある〔1958中村〕。大きさや2重の鏝などに、第Ⅱ型式との類似点を見ることができる（第5図1）。三叉文の彫りなどに違いもあるが、一応同一型式と考えておこう。今後の資料の増加をまって決定したいが、Ⅰ型式よりも広く、新潟県へも分布してるとしておこう。

#### 第Ⅲ型式

富山県に4例・石川県に1例・高山市に1例の、わずか6資料で、広がりには第Ⅰ型式と同じく加越能飛ということになる。

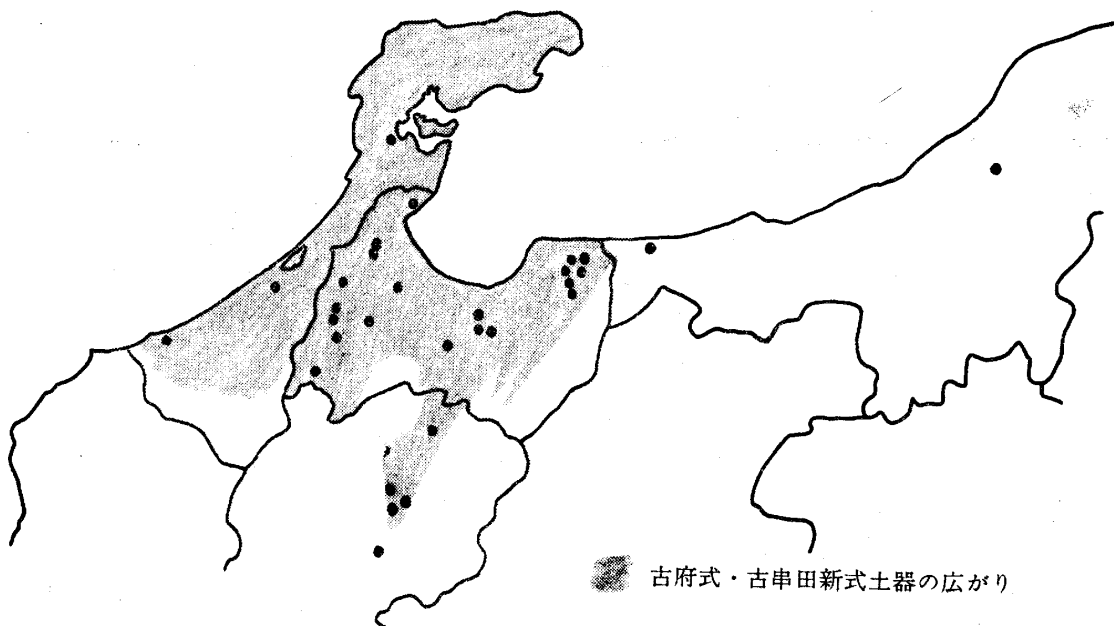
#### 第Ⅳ型式

この型式の石棒は、加越能飛以外でも散見できる。管見では、新潟県寺地〔1973寺村他〕・馬高〔1958中村〕・千石原〔1973中村・竹田・小林〕・吉野屋〔1974三条高校〕の各遺跡で、岐阜県では白鳥町前田〔1972檜崎他〕、長野県では大町京塚（大町山岳博物館蔵・第6図3）を知るが、以外にもまだありそうである。

古府式から古串田新式期の彫刻石棒の広がりには、Ⅱ型式石棒が新潟県まで広がりそうであるとはいうものの、加越能飛に中心を置くことが確実である。なかでも第Ⅰ型式の石棒は、加越能飛以外に出ていない。

この分布域は、古府式や古串田新式土器の分布域と同じい。例えば古府式土器の広がりについて高堀は、「前期後半以降一つにまとまっていた北陸土器圏は、この期にいたって馬高式と古府式土器圏に分裂し、新潟県と石川・富山県とで地域差が明瞭にあらわれてくることが注意されるのである」と述べている〔1965高堀〕し、筆者もまた同様に考えている〔1968小島〕。

飛弾は長野や東海の諸土器型式が入りこみ複雑であるが、古府式や古串田新式土器も神通川水系の高山周辺やさらに分水嶺を越えた益田川流域にも若干ながら入りこんでおり、彫刻石棒の広がり方と同じである。



第5図 彫刻石棒（Ⅰ～Ⅲ型式）の広がり



彫刻石棒、わけてもⅠ型と古府式・串田新式土器の分布圏は、全く重なるのである。

## 5. 彫刻石棒について

前章で、彫刻石棒は、ほぼその期を古府式・古串田新式期という縄文中期中頃のたかだか1・2型式間の短い間、しかも加越能飛という限られた地域に広がることを見た。

では、この彫刻石棒とは何を形どりたるものなのであろうか。私は、胴中央あるいはやや下端に最大径を持ち、上端を細すばまりにしここに1条ないし2条の鏝を巡らす石棒本体は、男根を表現していると考ええる。先端に穿たれた凹穴は尿外口、鏝や突帯は亀頭表現の約束事なのだ、推測するわけである。

彫刻は、どうであろうか。第ⅠⅡ型式の彫刻は、片玉だき三叉文と三叉文であるが、これから連想できるのは、中期の土器に施文される玉だき三叉文や三叉文であろうか。しかし、玉だき三叉文といい三叉文といい、これらが土器に施文されるのは、北陸では中期前葉の新崎式から天神山式に至る時期のみ（晩期にもあるが）である〔1974小島〕。彫刻石棒の所属期と考えた古府式古串田新式期の土器は、玉だき三叉文はもちろん三叉文をも施文せぬことが1つの目安にさえなっているのである。また彫刻石棒の玉だき三叉文は、土器のそれが多くは両玉だき三叉文であり玉も正円であるのに対し、片玉だき三叉文でありその玉も半円を意識しているなど、彫刻自体も違うのである。石棒の彫刻は土器の文様とは、区別して考えねばならぬ。とすれば、単にその時代に盛行した文様であるということではなく、強い意味を持った文様とみるべきであろう。

ここで援用できるのが、清野謙次の北海道余市町出土の土製品を報じた「男女生殖器を示し且同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」である。ここでは、玉だき三叉文形の彫刻を、女性生殖器であると解説している〔1925清野〕。私もこれにならい、またすでに石黒や中村・佐渡などが発表していたように、女性生殖器の表現と考えたい。第Ⅰ型式石棒は、男女両生殖器

が一体となった様であると、理解するわけである。

縄文中期の亀頭状表現の石棒が男根を形どったものであろうことはよく認められているところであり、当然男根を作出する意識の根底には、例えそれが表現されていないにしても、潜在的には女性生殖器との対比があったと考えられるだろう。長野県では、同一住居内の石棒と埋甕が男女両性として意識されていたのではないかとの考えもあり〔1976長崎〕、また福島県大畑遺跡では巨大な石棒頭部が巨大なアワビ72個などと出土したことから、生殖関係を通じて豊漁狩祈願したのだらうという報告〔1975馬目他〕もある。

男女両生殖器が、一体化して表現されたとしても何らそれは唐突なことではなく、石棒というものに本来潜在的に備わっていたものを表面化しただけと言うべきであろう。

第Ⅰ型式の玉だき三叉文を女性生殖器と認めれば、類似形態石棒の同部位に彫られるⅡ型の三叉文やⅢ型のV隆帯もまた、女性生殖器表現の約束事として理解することも、赦されよう。玉だき三叉文の玉を欠いた簡略化された表現と、考えるわけだ。出土遺跡からの検討では、ⅠⅡⅢ型式間に前後差はつけられなかったのだが、彫刻の推移をこのように考えれば、ⅠからⅡⅢ型式へ変化したという推論もできる。Ⅲ型の21・22は、石棒の側面に平面的に陰刻することによって男女の合体を表現していた従来のものを、より立体的に表わしたと考えられるのではないか。

なお、やや特殊な19と24にふれておこう。両者とも2段目鏝に彫刻があるのだが、私はこれを、以下のように考える。19も24も本来の玉だき三叉文表現から三叉文表現に変わろうとする時期で、玉の持った意味は捨て去られてしまったが、まだ形骸（もう半円ではない）として残り、その円が核となって装飾的な彫刻が加えられたのだと。またこの両石棒の出土が、彫刻石棒の分布圏では辺境の飛弾であることも、関係しているであろう。この点での面白い資料に、6図3がある。長野県大町の出土で、円柱状の

頭部に玉だき三叉文が彫られ、先端には凹穴もある。円柱状頭部・先端の凹穴・玉だき三叉文、単位個々を並べ上げればまさしくこれは加越能飛の第Ⅰ型式石棒なのである。しかし2段目鐙がなく、頭部に彫刻し、しかもそれが横位の玉だき三叉文で、玉も正円であり、総合的には第Ⅰ型式の石棒とは違うのである。加越能飛の彫刻石棒の存在を伝え聞いてでも、作ったのであろうか。

さて、すでにⅠⅡⅢ型石棒の分布圏は、一部新潟県内に広がるものの、基本的には加越能飛に限られるであろうと見てきたが、少し地域を広げて彫刻石棒をさがしてみよう。

よく知られているものに、長野県茅野市大塩出土の石棒がある。藤森は「堅穴内に立っていたが、それは頭の部分が人面に見えるものだったということを教わりました。頭が一つのことからも最初は特定のところに立てられていたのではないか」と語っている〔1900藤森〕。近くの尖石遺跡でも、太い円柱の頭部が平板な斜めで終っていてその斜平面の周囲を隆帯で縁どる石棒が出土している（尖石博物館蔵）。

もう1つ著名なものに、胴上部の側面に凹穴を穿つものがある。秋田の武藤一郎が大正13年早くも注目していたものである〔1924武藤〕。氏の報告から彫刻のある石棒として取り上げたものは、4例あって、いずれも秋田県内の出土である。富樫泰時氏によれば、それらの出土遺跡の中で時期の判明するのは、強首野柏台（仙北郡）・小砂川菅先（由利郡）遺跡で、いずれも中期に属すると言う。富樫氏と資料（6図5）を実見した仙北郡田沢湖町黒倉遺跡も、中期から後期初めである。同じように凹穴を彫る石棒は、山形県金淵B遺跡で出土している〔1966長谷川〕し、同県岡山遺跡の報告〔1972柏倉他〕では、第5号と6号住居跡からも発掘され、第5号住居跡は大木8a式期であったと言う。

凹穴を有する石棒は、中期中頃、秋田・山形県に分布域を限って存在していたと考えられるようだ。この凹穴について、武藤は割礼の痕跡と考えたが、私はその可否を云々する資料は持た

ない。ただ似た時期に加越能飛にもまた彫刻石棒があることを、再度確認しておきたい。

管見では、時代と地域的まとまりをもつ中期の彫刻石棒は、このようにわずかである。

## 6. 石棒の祀られかた

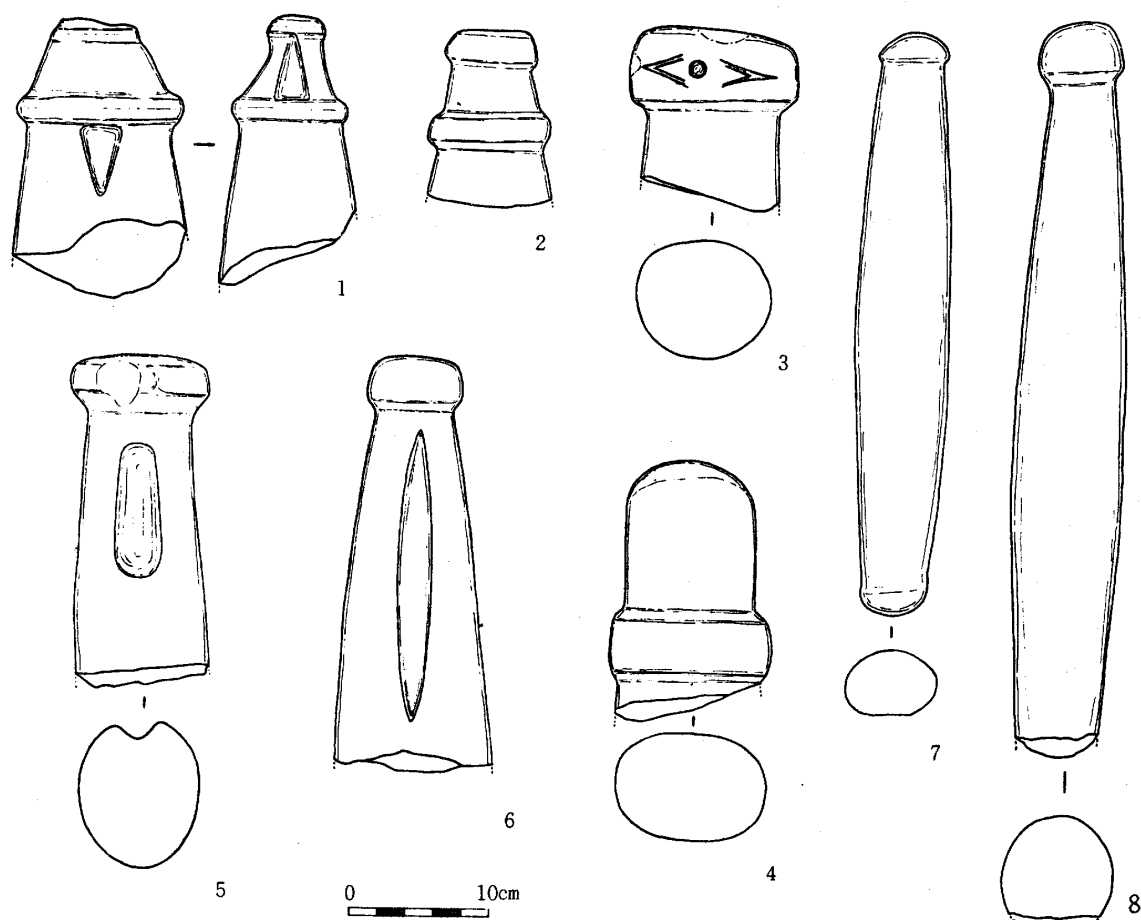
遺構に伴う発掘例をほとんど持たぬ加越能飛では、石棒がどのように祀られたかは、石棒自体の観察から類推する他はない。本章は、発掘例の多い長野県の例を援用しつつ、推測と問題点を上げるに止まらざるを得ない。

中期の前葉は、石棒資料そのものが皆無に近く一切の論議はできない。

中葉（加曾利E2式期）に入ると、資料は一挙に多くなる。男女両性の合体を表現するⅠⅡⅢ型、男根を表現するⅣⅤⅥⅦ型、柱状のⅧ型と型態も多様である。長野では、石柱は石壇上に立てることもあるが石棒を石壇上に立てることとはないなど、祭式に区別があると言われているが、これら諸型式もそれぞれ祭式型態を異にしたものかどうか、興味深い所であるが言及できない。

量の増大した石棒も、1遺跡ごとに見直してみれば、複数の発見例もありはするが、多くは単数の発見で多くない。もちろん、未発見ということ、あるいは集落廃棄の際に石棒も移動した、などのことを考慮せねばならないが、大規模な発掘を実施したこの期の古府・水上谷・直坂の各遺跡では、石棒は発掘時には検出されていない。石棒が種類と量を増加したとはいえ、各住居ごとに備わったものではなかったであろう。長野でも、石棒は特定の住居内から出土することが多く、この特殊住居は集団全体の共同家屋であり共同祭式の場であるという考え方がある〔1973長崎〕。堂上遺跡の石棒を樹立していた住居跡を、大野政雄氏は炉の大きさや形などから、特殊な住居であると言う。加越能飛でも、石棒は個々の家ではなく特殊な住居に伴っていた可能性が強かろう。住居外での設置も考えようが、具体的資料がない。

またこの期の遺跡の全てが石棒を保有したのかどうか、考えてみたい問題だが、現在はその



第6図 各地の彫刻石棒と後期の石棒

追究はできない。

中期の石棒が立てられていたことは、誤りあるまい。下端部を自然礫面のまま残して不整形に作り上げたものが多いこと、荒割りしたままのものもあることなど、基本的には下端部が土中に埋められたものであることを示していよう。堂上遺跡では、住居内石組炉の一隅にⅡ型式石棒が立てられていたし、美濃の牧野小山遺跡J3号住居内石組炉にも頭部を欠いてたが立てられていた例がある〔1973紅村・増子他〕。両者とも、埋甕があった。

この炉辺に立てるのは、長野でも祀りかたの1型式とされており、加越能飛でも石棒と炉が強いかかわっていたのであろう。しかし、全ての石棒がというわけにもいくまい。例えば、感覚的な把え方であるが、90cm大の石棒が炉辺に立てられた可能性があるだろうか。あまりにも巨大すぎるのではないか。さらに、彫刻石棒には、

正面性を有すものが少なくない。見るべき方向が、定まっているわけだ。もし住居に限るとすれば、大型のものは炉辺よりも見る方向が一定する奥壁や入口部がよりふさわしく思われなかろうか。

そのことに関連して注意すべきは、石棒の折損のことである。炉隅に立っていた同上也牧野小山遺跡の石棒も、下部が折れている。欠損品であるが、立てられていたわけである。石棒の欠損について、鳥居龍蔵〔1924〕は、始めから故意にこのような形に作ったものと言い、八幡一郎〔1944〕は、破摧後の再使用を思わせると書いている。私は、欠損している石棒が完形品の上半部の型態と同じいことや完形品が存在することから、多くの石棒は本来は完形品として下端部も丸く作り上げられたものと思っている。この欠損について小林達雄は、意識的に折ったのではないかと、筆者に考えを示されたこ

とがある。この見方で石棒を見返すと、欠損した石棒がそれなりに長さにとまりを持つかとも見て取れる。そのまとまりが、後出型と考えた、48や54・56の完形品と類似の長さであることも、注意してよからう。

古府・古串田新式期に70から90cm大の大型石棒が作られ奥壁あるいは入口などに立てられたが、小型化の傾向と炉の結びつきが強まった結果、従来の大形石棒も上端を折り取って炉辺に移されることになったのだとも、言えるかも知れない。

なお石棒の中で火勢を受けたと推察されるのは、勝木原遺跡の11・12・31のみである。同上遺跡の20は炉辺にあったにもかかわらず、若干の炭化物を頭部に付着させているだけで、特に火勢を受けた痕を残していない。

直接中期のことではないが、一つ書き加えておきたいことがある。それは、これら大型の石棒が縄文時代でも後に再び活用されているものがあることである。新潟県寺地遺跡の大洞 C<sub>1</sub> からA期に構築された配石遺構から、4本の大型石棒が出土した〔1973寺村〕。2本は立てられ他の2本は安置された状態で出土したと言い〔1973中島・伊藤・小島〕、単に配石の材として使用されたのではないと言う。調査者もこの石棒は縄文中期のものに近似した大きなものと表現しているが、IV型式の2重鏢のものⅢ型式に似た彫刻のあるものもあって、中期石棒と断定してよいであろう。中期の石棒が、晩期に再び生かされているわけだ。似た事例として、東京都田端遺跡も上げれる。加曽利BⅢ式期から晩期前半ごろにわたって使用されていた環状積石遺構やその周囲から石棒22点が認められ、中には1m×27cmの大型石棒も含まれていたと言う〔1969浅川・戸田・笹村〕。

これらを、中期以来連綿と石棒自体が伝世されたものとは考えないが、現在でも採集された大型石棒のなかには神社や祠に祭られたり、あるいは神様として床の間に置かれたりしている事例と重なって面白い。

## おわりに

以上、るるのべきだったが、彫刻石棒を再度振り返っておこう。

彫刻石棒の時期は、中期の古府・古串田新式期の短期間に限定できる。中期前葉に石棒の存在は認められはするものの、彫刻石棒の出現は、いかにも突然にという感じである。

この彫刻石棒を、本体は男性生殖器を、彫刻は女性生殖器を表現したものと筆者は結論づけた。彫刻が女性生殖器を表わしているという見方には、証明が不足していて飛躍があることを認めるが、石棒自身が男根を象しているとするれば（そしてそれは誤りなからう）、当然そこには相対する女性生殖器への意識がたえず存したであろうと考えるのは容易であり、とすれば男根表現の石棒に彫り込まれた彫刻を女性生殖器と見なすことも、あながち唐突な見方とばかりは言えまい。

男女両性を一本に表現した石棒が、何を祈ったものかは興味あるところで、当然今後の考察を必要とするが、筆者は今はこの彫刻石棒の分布に強い問題意識を持っている。その広がりには、若干が新潟県に広がってはいるものの、基本的には加越能飛に限定され、ちょうど古府式・古串田新式土器の分布の様と重複するのであった。

生活用具である土器の型式の広がりとは、祭祀に関する石棒の型式の広がりが同一であるのは、「型式とは集団の表現形式として把握される」〔1975小林〕を証しているかのようである。

彫刻石棒出現の古府・古串田新式期についても、ふれておかねばならない。この期は、中期の中でも特徴の多い時期とされている。遺跡や遺物が増加する。扇状地へ遺跡が進出する。打製石斧や石錘あるいは大型有孔鏢付土器が増加する。住居内に、複式石組炉が設置されるなどである。また土器型式の上からも、次の指摘ができる。富山・石川の縄文文化は、多くの時期を大きな東西の交点の中で生きづいてきているが、中期文化は長野地域・新潟地域との強い紐帯と逆に西方との断絶という動きで把えられ

る。ところが、除々に長野とそして新潟地域とも離れて、ついに富山・石川という狭いそして強い分布圏に落ちていた時期、それが古府・古串田新式期である〔1868小島〕。

彫刻石棒が、このような動きの多い中で誕生していることは、注目しておいてよからう。

この文を書くに当り、遺物所蔵の方々には無理をお願いして資料の提供をいただき、また多くの方々にも御指導と助言をいただいた。お礼を申しあげる。なお、久々野町教育委員会と大野政雄氏からは、未発表の堂上遺跡の資料の使用をお許しいただき、本文の一つのポイントにできたことを、深く感謝したい。小林達雄・富樫泰時氏には、いつもながら種々御指導をいただいた。このように多くの人の手をわずらわせながら、まとまりのない文になってしまった。この上は、多くの御叱正をいただきたいものである。

#### 注

1. 亀頭状の突出や鏝以外に、彫り込みや突起を造り加えたものを、この名で呼ぶ。
2. 加賀・越中・能登・飛騨の国名から前1字ずつ取ったもので、石川・富山の両県と岐阜県北部域を表わす語として、便宜的に用いる。
3. 玉1個と三叉文1個の組み合わせを片玉だき三叉文玉1個とこれを挟む三叉文2個の組み合わせを両玉だき三叉文と呼ぶ。
4. 堂上遺跡の発掘調査は、昭和48年以来続けられていて、報告書の刊行もまだであるが、久々野町教育委員会と調査団長大野政雄氏から出土状況を説明いただき、また石棒発表の御了解もいただいた。記して、謝意を表す。
5. 富山県教育委員会が実施した調査で、担当者は柳井・酒井の両氏である。御教示を謝す。
6. 富山県教育委員会が実施した調査で、担当者は池野・柳井の両氏である。御教示を謝す。

#### 参 考 文 献

- |                |      |   |
|----------------|------|---|
| 浅川 利一          | 1969 | 『東京都町田市田端遺跡調査概報 戸田・笹村——第1次——』町田市教育委員会       |
| 石黒 松吉          | 1936 | 「石棒物語」ひだびと第4巻第5号                            |
| 大野 雲外          | 1896 | 「常陸国霞カ浦沿岸旅行談(続)」東京人類学会雑誌11/123              |
| 大野 雲外          | 1926 | 『遺跡遺物より観たる日本先住民の研究』                         |
| 大場 磐雄          | 1935 | 『考古学』                                       |
| 大村 正之          | 1922 | 「大境洞窟住居跡」富山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第3号               |
| 小笠原迷宮          | 1924 | 「男根形の珍らしき土製品」人類学雑誌39巻3号                     |
| 小笠原迷宮          | 1924 | 「岩手県における性的製作品の一二」考古学雑誌第14巻第14号              |
| 柏倉 亮吉          | 1972 | 『岡山』  |
| 神田 孝平          | 1886 | 『日本太古石器考』                                   |
| 神田 由道          | 1886 | 「古文文字考」東京人類学会報告1/7                          |
| 木倉 豊信<br>湊 晨   | 1959 | 「古代・中世の城端地方」『城端町史』所収                        |
| 岸本 雅敏<br>山本・池野 | 1975 | 『富山県城端町西原遺跡第2次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会             |
| 清野 謙次          | 1925 | 「男女生殖器を示し且つ同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」考古学雑誌第15巻第3号 |
| 甲野 勇           | 1935 | 「関東地方における縄紋式石器時代文化の変遷」史前学雑誌第7巻第3号           |
| 甲野 勇           | 1947 | 『図解先史考古学入門』                                 |
| 紅村 弘<br>増子康真 他 | 1973 | 『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会                 |
| 小島 俊彰          | 1968 | 「北陸における縄文前期末の様相」信濃第20巻第4号                   |
| 小島 俊彰          | 1974 | 「北陸の縄文時代中期の編年」大境第5号                         |
| 小島 俊彰          | 1972 | 「縄文中期」『富山県史考古編』所収                           |
| 小林 達雄          | 1975 | 「タイポロジー」『日本の旧石器文化I』所収                       |
| 後藤 守一          | 1947 | 『私たちの考古学』                                   |
| 嵯峨井 亮<br>村井 一郎 | 1970 | 「石川県押水町紺屋町ホンデン」遺跡調査報告(第2次)」石川考古学研究会々誌第13号   |
| 佐藤 伝蔵          | 1896 | 「日本石器時代石棒頭部彫刻考」東京人類学会雑誌12/129               |

- 佐渡 忠作 1967 『宇奈月町の石器と土器』  
三条商業高校社会科クラブ考古班 1974 『吉野屋遺跡』
- 柴田 常恵 1921 『日本考古学』  
柴田 常恵 1928 「石器時代の住居跡」考古学研究録一  
谷川 磐雄  
柴田 常雄 1937 「日本原始時代の宗教」歴史公論第6巻第1号
- 杉畠 孝博 1973 「輪島市大沢遺跡」石川考古学研究会々誌第16号
- 高堀 勝喜 1955 「先史文化」『能登』所収  
高堀 勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性——北陸——」『日本の考古学Ⅱ』所収
- 高堀 勝喜 1974 「富来町の考古資料・縄文時代の遺跡」『富来町史資料編』所収  
市堀 藤夫
- 津田 敬武 1920 『神道起原論』  
坪井正五郎 1888 「貝塚とは何であるか」東京人類学会雑誌3ノ29
- 出口 米吉 1901 「本邦生殖器崇拜研究材料」北陸人類学会誌第4編
- 寺村 光晴 1963 「その他の遺物(縄文時代)」『加賀片山津玉造遺跡の研究』  
寺村光晴他 1973 『寺地硬玉遺跡第4次発掘調査概要』青海町教育委員会
- 富山県教育委員会 1973 『富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報』  
富山県教育委員会 1974 『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』  
富山県教育委員会 1974 『富山県庄川町松原遺跡試掘調査報告書』
- 鳥居 龍蔵 1923 「吾人祖先有史以前の男根尊拝」人類学雑誌38巻3号
- 鳥居 龍蔵 1924 『諏訪史第一巻』  
鳥居 龍蔵 1926 『先史及原史時代の上伊那』  
八幡 一郎
- 中口 裕 1965 「加賀片山津玉造遺跡研究補遺」石川考古学研究会々誌第9号
- 長崎 元廣 1973 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義(上)(下)」信濃第25巻第4号
- 長崎 元廣 1976 「石棒祭祀と集団構成」季刊どるめん8
- 中村 土徳 1902 「墓標に利用したる石棒」東京人類学会雑誌17ノ196
- 中村 奇雲 1967 「郷土文化の夜あけ」『入善町誌』
- 中村孝三郎 1958 『馬高』  
中村孝三郎 1973 『千石原』  
竹田・小林
- 中谷治宇二郎 1926 『日本石器時代提要』  
檜崎彰一 他 1972 『岐阜県史通史編原始』  
西井 龍儀 1972 「臼谷遺跡」『富山県史考古編』
- 所収  
羽柴 雄輔 1888 「石棒の用法」東京人類学会雑誌4ノ31
- 橋本 正 1974 『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会  
神保 孝造
- 長谷川かい子 1966 「石棒にあらわれた古代文化」庄内考古学2号
- 早川 莊作 1926 『越中石器時代民族遺跡遺物』  
早川 莊作 1936 『越中史前文化』  
林 魁一 1935 「飛騨高山附近の石器時代及び遺物」史前学雑誌第5巻第2号
- 藤森 栄一 1948 「日本原始陸耕の諸問題」歴史評論4・4
- 藤森 栄一 1965 『井戸尻』  
馬目順一 他 1975 『大畑貝塚調査報告』福島県・いわき市教育委員会
- 水野 正好 1963 「縄文式文化期における集落構造と宗教遺構」日本考古学協会第29回総会発表
- 三森 定男 1939 「先史時代の東部日本」人類学先史学講座第12巻
- 湊 晨 1958 「郷土のあけぼの」『富山県の歴史と文化』所収
- 湊 晨 1966 「氷見海岸の人文景観と文化財」氷見海岸二上山学術調査書
- 宮坂 英弼 1968 『尖石』  
武藤 一郎 1924 「石棒に現れたる割礼の痕跡に就て」考古学雑誌第14巻第6号
- 森本 六爾 1943 『日本考古学研究』所収
- 八幡 一郎 1928 『南佐久郡の考古学的調査』  
八幡 一郎 1934 『北佐久郡の考古学的調査』  
八幡 一郎 1939 「日本先史人の信仰問題」人類学先史学講座第13巻
- 四柳 嘉孝 1950 「鳳至郡内縄文式土器遺跡地案内」石川考古学研究会々誌第2号
- 若林 勝邦 1886 「石棒ノ比較研究」東京人類学会報告1ノ8
- 若林 勝邦 1887 「日本匚製石棒」東京人類学会雑誌3ノ26